

オレンジの壺 上

mykamoto keri

宮本輝

オレンジの壺

宮本輝

miyamoto teru

上

光文社

お願い

この本をお読みになって、どんな感想をもたれたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけますしたら、ありがたく存じます。

なお、このほかに、「光文社の本」では、どんな本を読まれたでしょうか。どの本にも、一字でも誤植がないようにつとめておりますが、もしお気づきの点がありましたら、お教えください。ご職業、ご年齢などもお書きそえくだされば、幸せに存じます。

東京都文京区音羽二―二―一三

(〒112-11)

光文社 文芸編集部

オレンジの壺 [上]

一九九三年九月一日 初版第一刷発行

著者 宮本 輝

発行者 大坪 昌夫

発行所 株式会社 光文社

東京都文京区音羽二―二―一三
電話 東京(〇三)三九四二―三三四一(代)

振替 東京六―一五三四七

印刷所 堀内印刷

製本所 ナショナル製本

定価 一、四〇〇円
(本体一、三五九円)

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。 © Teru Miyamoto 1993

ISBN4-334-92225-2 Printed in Japan

[R]本書の全部または一部を無断で複写複製(コピー)することは、著作権法上での例外を除き、禁じられています。本書からの複写を希望される場合は、日本複写権センター(03-3269-5784)にご連絡ください。

へ上巻へ目次

第一章	錆びた扉	5
第二章	祖父の日記	35
第三章	手紙	81
第四章	一九二三年	129
第五章	シェラミ・ホテル	175
第六章	グエン・ヤーの話	223

装 装
幀 画
菊 建
地 石
信 修
義 志

オレンジの壺

上
巻

第一章 錆びた扉

長くつづいた烈しい雨がやっと弱まり、ひととき霧みたいに西から東へと流れ、そしてやんだ。田沼佐和子は、長雨の終わりを確かめるために、十日ぶりに戸外に出、兄がアメリカから送ってくれた銀製のキーホルダーを何度も宙に投げ上げた。

その次の日、アスファルトの道も、コンクリートの階段も、わずかな土や緑も、道行く人間たちも、建物という建物すべても、熱い蒸気の源となつてぶつかり合い、混ざり合い、大都会の上空で膨れる入道雲に押えつけられて行き場を失くした。夏の光を浴びるところは焼けつき、影の中では、ぬるま湯のような汗がはびこつて、あらゆる有機物は腐り、無機物は錆びるのではないかと思われた。

夕方の四時前に、佐和子は洗濯物を取り入れ、マンションの六階にある自分の部屋から、真下の道路をへだてて見える小さな公園の周りに目をやった。背の高い老人が、掌に載るくらいのも、毛の長い犬を散歩させている。老人の一步は、犬の十歩よりもはるかに長いので、犬と老人はし

よっちゅう絡み合つて、そのつど、犬は身をすくめて路上に坐り込んでしまふのだった。そんな老人の、犬を紐で引つ張る力は苛虐^{かぎやく}だったが、それは癖であつて、きっと老人と犬とはとても心の通ひ合つた仲なのに違ひない、といつも佐和子は思うのである。

犬でも飼おうかと佐和子は考えたりしたが、朝と夕に散歩させてやらなければならぬことを思うと、どうにも億劫^{おくせう}で、まだ当分、この三LDKのマンションの一室で、息をひそめていようと決めた。

佐和子は、アイス・ティーを作つて、それをリビングルームのテーブルに運ぶと、クッキーをかじりながら、ソファに寝そべつた。へお前には、どこも悪いところはない。だけど、いいところもぜんぜんないんだ。女としての魅力も、人間としての味わいも、まったく皆無だ。一カ月前に、正式に離婚した夫の、別れぎわの言葉は、佐和子の心に深く刺さつていて、それは決まつて夕刻近くに甦^{よみがえ}り、まだ二十五歳の佐和子の顔を、年老いた失意の寡婦^{かふ}みたいにしよんぼりさせるのである。

「あなたも、そんな人間よ」

家庭裁判所の長い廊下で、弁護士と並んで去つて行く夫に、佐和子は大声でそう言い返そうとしたが、周りをはばかりて黙つていた。

結婚生活は、わずか一年だった。大学を卒業して、父の勧めでロンドンのカレッジに留学したが、半年もたたないうちに見合ひの話が持ちあがり、とにかく逢うだけでもという母の強い説得で帰国し、赤坂のホテルで食事をした。

佐和子は、そのとき、格別の好意も悪意も感じなかったが、相手のほうから、数日後、家庭をしつかり守ってくれる人だと思ふという返事があった。それは、佐和子にとつてまったく驚天動地の返事であった。なぜなら、佐和子は、少なくとも男と女という関係において、男性に受け容れられたことがなかったからである。

佐和子は、六人兄妹の末っ子で、両親も高齢だったので、自分の気持がまとまりきらないあいだに話は進んでしまった。そうして結婚してしまったことについては、佐和子は、自分に自信がなかったせいで、誰の責任でもないと思っている。

アイス・ティーを飲み終え、洗濯物をたたんでいると、母と一緒に箱根に避暑に行ったはずの父から電話がかかった。

「急に思いついてね。夜、一緒に飯でも食わんか」

「いま箱根でしょう？ 私、箱根まで出向いて行くのはいやだわ」

いったん箱根に着いたのだが、母だけ残して、いま東京駅に戻って来たと父は言った。

「急に思いついたって、何を？」

「お前の、これからのことだ」

父の悪い癖だ、自分は石橋を叩いて渡るくせに、自分以外の者には冒険を要求する……。佐和子は、そんな父にもう翻弄はんろうされたくなかったので、

「これからのことなんて、まだ考える気にもならないわ。しばらくほっといて」
とけだるい口調で言った。

整理しきれないほどの一瞬の閃きは鋭利だが、絶えずその鋭利さで横道にそれ、結局、事業家としての穩便な計算が閃きを引つ込ませて、祖父の築いた社業を發展させた。

しかし、跡継ぎの長男以外の子供たち、たとえば次男には、閃いた横道へ強引に進ませ、社業とは畑違いのマンション経営につかせて成功させた。三男には高校生のときからアメリカに留学させ、そこを拠点に西ヨーロッパへの何十回もの旅行の経験を積ませて、高級なツアーを企画する旅行代理店を創業させ、ここ四、五年で大幅に収益をあげている。

活発で器量のよい長女には、仕事熱心で穩やかな人柄の広告企画会社の若い社長と結婚させ、かなりの資金援助をしてやって、大手スポンサーと直接の仕事が出来るまでに成長させた。小さいときから病気がちの次女は、三十歳になるが幾つかの縁談を断わり、実家に置いて、きままな生活をさせている。

すべては、父の閃きの結果であつた。自分の閃きに揺るぎない自信を持ちながらも、實際は小心で、精神的に不安定で、しかも、進歩的でありながら、世の中の規範に対しては臆病だつた。父にとつては、結果がすべてであるにもかかわらず、失敗に対しての自己弁護には、考えつくかぎりの詭弁を弄し、情にもろいふりをして、そのじつ冷酷であつたりする。少なくとも、いまのところ、佐和子は父をそのように分析しているのである。

父は、都内のホテルの名を告げ、

「八時にロビーで待つてゐるぞ」

と言つて電話を切つた。

「どこにも、出掛けたくないのよ」

佐和子は、うんざりして、ひとりごちたが、父がいったい何を思いついたのか、多少の興味も抱いた。まさか、再婚話を持ち出すことはあるまい。父の性格から推測して、その心配だけは無用だと思えた。

叔父から結婚祝いに貰ったドイツ製のドレッサーの傍に立ち、楕円形の、高さ五十センチ、幅四十センチの鏡をはめ込んである樫の木をぼんやり撫でさすった。熟練の職人が手仕事で精密に彫った葡萄の房は、ドレッサーの縁や裏面や頑丈な脚にたわわに実り、葉と蔓は力強く自在に伸びていた。佐和子は、ほかにすることもないので、何日か振りで、鏡を拭いた。そうしながら、あまり見たくない自分の顔に視線を送ったり外したりした。

たとえ短い期間であっても、夫婦として暮らした男に、女の魅力も人間の味わいもないと言われたことは、いっそう佐和子から光沢を奪ってしまった。その言葉が佐和子に与えた傷は、離婚によるそれよりも、はるかに重かったのである。

恐る恐る、鏡に映る顔と向かい合い、佐和子は、決して美人ではないが、器量が悪いというわけではないと思った。普通の顔だ。目は大きすぎないし細すぎることもない。

でも、どんなに工夫して塗っても、アイシャドーは私の目を狸みたいにさせる。鼻も高すぎず低すぎず、ひしゃげてもない。唇は、閉じると幾分尖ったようになるのが欠点といえば欠点ぐらいで、頬がこけているのは、ここ数カ月の離婚による心労のせいだ。

「だけど、いかり肩で、ペチャパイで、お尻は垂れてるし、大根足なのよね」

人間としての味わいが皆無だ……。佐和子は心の中で何回も自分にそう言ってみた。確かに、面白い女ではあるまい。子供のころから、自分の冗談が周囲の人を笑わせたことは稀だし、流行のファッションに飛びついたこともない。友だちとお喋りをするよりも、ひとりで本を読んだり映画館の暗がりには坐っているほうが好きだった。そしてそんな自分を改めようなどとは考えたこともない。

「やっぱり、悪いところもないけど、いいところもない、つまらない女なんだわ……」

佐和子は、ドレッサーの前から離れ、たたんだ洗濯物を簞笥にしまうと、自嘲ぎみにそうつぶやき、顔を洗うために、けだるく洗面所に行った。

約束の時間より三十分ほど早くホテルに着いたが、父の徳之は、すでにロビー横のラウンジで、抹茶を飲んでいた。六十二歳なのに、固い髪は白くなるばかりでいっこうに減らず、奥歯の一本を十年前に抜いただけで、あとはすべて自分の歯であった。

「ちょっとは、やる気が出たか。人間は、前向きでなきゃいかん。雨の日も風の日も、前を見る」

徳之は、佐和子がテーブルを挟んでソファに腰を降ろすなり言った。

「やる気？ 何のためのやる気？」

多少むかつとしたが、佐和子はそれを抑えて訊き返した。徳之は、茶色いジャケットの胸ポケットから、ビニールで覆った薄い紙袋を出し、佐和子の前に差し出した。そして、

「俺は、ことしの九月に社長をやめるよ」

と言った。

「株主総会の根回しも済んだ。博之も今年で三十五歳になる。俺の跡を継ぐにはちょっと早いかもしれないが、帝王学も、いちおう完了ってとこだ。俺は、会長になって、息子のアドヴァイザーに徹する。それに、美奈子にも、おあつらえ向きの相手があらわれた。九州の大学病院に勤めてる医者だ。博之の友人の弟でね、なんと俺やお母さんの知らないあいだに、美奈子はその医者となつてた。びっくりしたよ。友だちの家に泊まるなんて言って、飛行機で九州へ行って、その医者となつてたんだ。あ的美奈子がだぞ」

「それ、ほんと？」

徳之は、しかめっ面のどこかに笑みを隠して頷いた。小学校二年生のときに小児結核にかかり、そのために中学への進学が二年遅れた次女的美奈子は、高校を卒業するころ、軽い心臓喘息（きんざうぜんぜん）を患い、無理のきかない体なのだった。

「相手がまた循環器専門の医者ときてる。こんな結構な話はないよ。相手は三十五歳で独身だから、いちおう興信所に身辺を調べさせた。とりたてて問題はなかった。来週の土曜日、正式に美奈子との結婚の意思表示に来る予定だ」

「よかったわね。美奈子姉さん、おとなしそうに見えて、ほんとに凄く無鉄砲で情熱家なのよ」
なんだか自分だけが、ひとりぼつんと道から外れて取り残されてしまった気がして、佐和子は最も仲の良い姉の美奈子の幸福をねたんだ。彼女は父に似たのであろう固い髪の裾をしきりに両

手で整え、両親にも姉姉にも黙っているつもりだった夫の別れ際の言葉を、うなだれたまま父に言った。泣きたくなかったが、涙は出なかった。

徳之は、佐和子の、聞き取りにくくて短い言葉を無言で聞き、意味不明の領きを何度か繰り返してから、なおしばらく口を開かなかった。娘を侮辱おじやくされた怒りをむき出しにするかと思っていたが、徳之は意外に冷静に、

「あいつは、お前に対してそう感じたんだろう。そう感じるのは、あいつの勝手だ。あいつにとったら、お前という妻は、そうだったのかもしれない。しかし、俺は、佐和子のいいところをたくさん知ってるつもりだよ」

と言った。父には珍しく公平な判断だなと妙に感心しつつ、佐和子は泣きたいのに涙がわずかでも滲にじまないのを不思議に思った。

「お前の別れた亭主も、人生の機微がわかるようなやつじゃなかったぜ」

徳之は、そこでやっと表情に怒りを込め、大きく鼻で笑ったが、ふいに身を乗り出すと、声をひそめ、

「これから先、どんな人と巡り逢うかはわからんが、俺はいまのところ、田沼佐和子という女は、結婚生活には向いていないような気がする」

そう言って、テーブルの上の紙袋を人差し指でつついた。

「この中には、腕利きの税理会計士の名刺と、二千万円の小切手が入ってる。この金で、何か商売をやってみろ」